

レオン・ワルラス 著  
御崎加代子・山下博 訳  
『ワルラス 社会経済学研究』

日本経済評論社  
2023年、442pp.

酒井泰弘  
Yasuhiro Sakai  
滋賀大学 / 名誉教授

レオン・ワルラス (Léon Walras, 1834-1910) は、経済学の長い歴史の中で燦然と輝くスーパースターの一人である。このことは、現時点において、何人も否定できない厳然たる事実であろう。だが、ワルラスの歩んだ足跡を振り返ってみると、出発点において彼ほど苦難と辛酸を舐め、かつ名声を得た後においても彼ほど誤解と曲解を生み続けている巨人は殆ど他にいない。実に、ワルラスは「経済学史上のユニークなユニコーン」なのである。

評者がはるか1968年、大学紛争の中で混迷する日本社会を脱出し、はるばる(かつての敵国だった) アメリカ東部のロチェスター大学経済学研究科に入学した時のことである。初年度の受講科目が「現代価値理論」(modern value theory)であり、ワルラスの「純粋経済学」(pure theory)の英語版がその時のテキストとして使用された。次年度の受講科目「一般均衡理論」(general equilibrium theory)において、「カクタニの不動点定理」を駆使した「一般均衡解の存在証明」なるものが、帝王・マッケンジー教授によって数学的に厳密に証明された。その結果、我々受講生の頭の中では、「ワルラス=一般均衡理論」という等式が自ずから醸成されてしまったのだ。「ワルラス体系とはそんな単純なものではないよ。実は、もっと複雑で、多元的なものなのだ」と評者が悟ったのはその3年後、「雪国」ロチェスターを離れて「鉄の町」ピッツバーグ大学において、途上国の学生た

ちを相手に理論経済学体系を教えた貴重な経験を通してからであった。

「ワルラスの経済学」とは、一体全体どういうものなのか。この難題を解き明かす重要な鍵が、今回の訳書によって与えられていると考えてよい。評者の経験から推測して、いわゆる「重要著作」と見做されているものは、訳者泣かせの「難解著作」であることが少なくないのだ。例えば、J.M. ケインズの『蓋然性論』(A Treatise on Probability, 1921)や、フランク・ナイトの『リスク、不確実性及び利潤』(Risk, Uncertainty and Profit, 1921)が、その種の難物なのだ。今回のワルラスの『社会経済学研究』(Études d'économie sociale)に関しても、中心訳者の御崎加代子氏は「訳者あとがき」の所で、翻訳作業の完成に10年以上の歳月を要したと、正直に告白しておられる。そして、ベテラン共訳者の山下博氏(大阪大学名誉教授)の親切な御協力なしには、翻訳の完成は至難の業であったとも述懐しておられる。実際、各章の終わりには、親切な「訳注」が付けられており、「ご両人様、本当に御苦勞様でした」と、評者はただ首を垂れたい気持ちで一杯である。

御崎教授は冒頭の「訳者解説」の中で、「ワルラス社会経済学への評価と現代的な意義」について興味深い叙述をしておられる。ワルラスの経済学体系は、純粋経済学、応用経済学および社会経済学の三本柱から成る。だが、評者自身が学ん

だロチェスター大学を含めて、英米の経済学界においては、純粋経済学の支柱が余りにも過大評価されすぎて、他の二本の支柱の存在自体がほとんど無視されている有様である。これでは余りにもアンバランスだと断じざるを得ないだろう。御崎教授が力説されるように、ワルラス自身は一方的な自由放任主義者では決してなく、むしろ「熱情的な正義感」の持主として、「効率と公平の両立」について大いに心を砕いていた。だが、本訳書を見る限り、それは書簡や公開講義や諸論稿の寄せ集めに過ぎず、ワルラスの熱情が空回りして、広く浅く霧散してしまった感じが否めない。現代に生きる我々は、遅ればせながら、三本柱から成るワルラスの大伽藍を謙虚に構築し直す必要があるだろう。

本書は普通の研究書とは異なり、第I部は「エド・シェレ氏への書簡」から始まっている。そこでワルラスが雄弁に社会主義と自由主義の関係について論じ、次のように論じているのは興味深い。「私〔ワルラス〕は、科学的見地からは社会主義者ですが、政治的見地からすると自由主義者なのです」(本訳書21頁)。かかる明快なワルラスの立場が、一般の経済学者の間に十分浸透していないのは、残念の極みであろう。しかも、この本書簡こそが、本書の中の「最も難解なパート」(あとがき442頁)である。「冒頭に断崖ありき」という叙述スタイルは、かのケインズの『一般理論』やマルクスの『資本論』にも通じるものであり、一般読者の読解力を相当に試すものであろう。

その次に来るのが、「パリにおける公開講義」である。ここでは、経済社会問題における「利益の原理」と「正義の原理」の競合などが、精力的かつ広範に論じられている。評者が米国で学んだ一般均衡理論によれば、「競争均衡解はパレート最適解であり、その逆も真である」わけだから、いわば「競争=最適」の等式が成り立ち、「血が湧き肉躍る」

ような「正義の原理」は議論の中から完全に忘却されている。それに反して、かの宇沢弘文教授は元々は純粋数学の専攻であったものの、河上肇教授の名著『貧乏物語』を通じて、正義の原理としての「社会的共通資本」の構築に後半生を捧げられた。

紙面が限られているので、442頁に及ぶ本書の内容を丁寧論じすることはミッション・インポシブルである。本書第II部では「所有」、第III部では「社会理念の実現」が、いかにも正義感ワルラスらしく熱っぽく論じられている。ただ、かつての『純粋理論』の中に見られた「透徹した論理展開」がそこにはなく、ごく断片的な論述に終始しているのは、至極残念というほかない。評者が感銘を受けた所は、本書の最後の所で力説している、次のごとき文章である。「今日の若者が立ち上がって、経済学や社会科学を、ブルジョア保守主義や金融封建主義の侍女のような忌まわしく惨めな状態から、救い出すのを見たいものである」(426頁)。

評者が1970年代、米国東部のピッツバーグ大学にて、理論経済学を教えていた頃の話である。その時、スウェーデン生まれで同大学にも在籍した気鋭の学者アクセル・レイオンフーヴッドが、話題作『ケインジアン経済学とケインズの経済学』(1968年)を世に出した。彼によると、アメリカで主流の「ケインジアン経済学」は、均衡論的なIS-PL分析に依拠しており、本来の(不均衡重視の)「ケインズの経済学」では決してない。同じ論法を用いれば、ワルラスのいわゆる「純粋経済学」は、「利益の原理」一辺倒の「ワルラシアン経済学」であっても、本来の(「正義の原理」重視の)「ワルラスの経済学」では決してないだろう。

考えてみれば、ワルラスの経済思想は、世界に伍して早くから、わが日本において愛され、かつ徹底的に研究発展された思想である。古くは、中山

伊知郎氏や安井琢磨氏の業績が輝いていた。近時においては、ロンドン大学の森嶋通夫教授によって、その論理的・数学的構造が明確に示された。御崎加代子氏によるワルラス研究は、この系譜に連なる画期的なものとして評価されてよいだろう。本書の公刊を契機として、ワルラスの深淵な経済思想が、今後ますます広く深く再検討されることを切に期待するものである。